

日本におけるソローキン研究

——書誌学的考察——

吉野浩司

はじめに

20世紀を代表する社会学者ピティリム・A・ソローキン（Pitirim Alexandrovich Sorokin, 1889-1968）は、現在でも故国ロシアや亡命国アメリカはもとより世界的にも社会学史の一齣にその名をとどめている。日本においてもソローキンの学問を継承しようとする研究が、細々とではあるが脈々と受け継がれている。本稿ではそうしたソローキン研究の系譜をたどり、日本社会学の歴史に現れたソローキン像を浮かび上がらせるとともに、その系譜がいかなる人々によって形成されてきたのかについて検討してみたい。

とはいえ「書誌学的」とはいかにも堅苦しく響くであろう。しかも遺漏なきとはしない本稿のような課題に、あえて「書誌学的考察」と副題を銘打ったのには、理由がある。それは、力のおよぶかぎり博搜につとめて集めた個々の研究の意義を再検討するのはもちろんのこと、それとは別に資料の全体である研究史自体に、新たな意味を付与する試みを行ってみたかったからである。つまりここではこれまでの研究史を、ただ発表年代順に漫然と羅列し、解説しただけの解題目録の体裁を取ることを避け、ソローキンの研究分野に即して分類、編集しなおしている。ためにソローキンの等身大の全貌は浮かび上がってはいないし、むしろ何がしかの偏りがあるといった方が適切であろう。しかしその偏りこそがほかならない日本の社会学特有の歴史を、くっきりと刻み付けたのだと筆者は考えている。つまりソローキンというテーマを日本社会学がいかに扱ってきたのかの歴史をこれは示しているのである。そうした意味で本稿は、単なる解題や目録を超える研究史のありかたを模索した試みにほかならない。

第1章 『社会的・文化的動学』の研究

第1節 方法論——第1巻第1部——

難解をもって鳴る全4巻の大著『社会的・文化的動学』（1937-41）を通覧するには、なにはさておき方法論にあてられた第1巻第1部に習熟しておかなくてはなるまい。本章でこれらの箇所の読解作業に取り組んだ諸論説が、ソローキンの方法論の骨格をいかに理解してきたのかを明らかにしておくことにしたい。さしあたりの見取り図として第1部の目次を記しておく。

第1章 文化統合の形式と問題、そしてその研究方法

第2章 観念的、感覺的、理想的、そして混合的な文化システム

第3章 主な文化意識の型の具体的な例

第4章 社会文化的波動——社会文化的過程の概念と形式——

1. 第1章について

本書の第1章は山本新によって、あらまし以下のように摘要されている。「現にある文化は、1つの統一原理によって隅々までつらぬかれているのではなく、統一原理のほかにも、それに関係のない、それと矛盾するような雑多物が沢山まじっている。文化は、大きくわけて、システムをなすものと、システムをなさぬものからなっており、システムをなすものは、その部分が因果的に結びあい、意味連関をもっているが、そうでないものは、因果的につながりがなく、意味の連関もなく、ばらばらの混在に過ぎない。それを〔ソローキンは〕Congeriesと名づけている。システムをなすというのは、ある部分に変化がおきたら、他の部分にもその変化が伝わったり、全体を変えるまで、変化が波及していくような相互連関が部分相互のあいだにあることである。…これに反し、部分に変化がおこっても、他の部分に変化が波及せず、全体がすこしも痛痒を感じないような場合、その部分は、他の部分とも、全体とも、因果的に結ばれていない。だから、『特定の地域の全体文化』は、たくさんのシステムとシステムをなさぬものが共存しており、システム同士でも矛盾するものもあれば、調和するものも、また中立的なものもある。…〔したがって〕全体文化にふく

まれる細部を個々にいくらしらべても、システムの雑居やスーパー・システムの統合の状態をつかめなければ、文化の基本軸と構造、したがってその変動を理解することができない」（山本, 1961, 472頁, 但し亀甲内は引用者, 以下同じ）。

以上はソローキンの基本視角を過不足なく解説した含蓄のある一文である。さらに山本は、こう続ける。もちろん批判的な見方をすれば「ソローキンのスーパー・システムは、文化の（文明ではない）高次の統合形態だが、具体性がとぼしく、どの文明にも適用できる固有のもの」（山本, 1961, 474頁, 478頁-479頁）であるといえなくもないが、それだからこそ「もっとも厳密で、一貫性があり、もっとも拡がりをもっている、図抜けた代表者」（山本, 1961, 483頁）たりえた事実も閑却するわけにはいかないであろう。ことに社会システムと文化システムの峻別、因果的、意味的な連関によるシステムの定義、あるいは上位システム（supersystem）と呼称される観念的、感覚的、理想的な文化の類型の発見、そしてこれを機軸とする変動論の定式化、さらには統一性をもたない文明の貶価と統一性を基準にしたシステムの明確化などは、ソローキンをおいてほかに誰がなしたであろうか（山本, 1961, 486頁-487頁）。

このようにソローキンは第1章において、文化全体の中には統合原理により相互に結びついているシステムとその周辺につもった集積（congeries）とがあることを明らかにした。このような構造をもつ文化に包蔵された意味を考察する方法の提示が、つづく第2章での課題であった。

2. 第2章について

小論とはいえ第2章に関しては下程勇吉の「三つの『文化の型』」（下程, 1977）が出色の出来映えを示している。下程によると、「本書『利他愛』⁽¹⁾」を理解する上に大切な鍵は、ソローキンの3つの文化の型の概念」（下程, 1977, 285頁）にあるのだが、これを拡大解釈して、引用文中の「本書」という言葉を、ソローキンの全ての著作と置き換えてもいっこうに差し支えないであろう⁽²⁾。下程は「人間性の力学を支配する場」である「有意義的な人間関係^{（インテグラル）}」の探求こそがソローキンの真骨頂であるとして、この人間関係の場に「鋭い心理

(1) 利他愛に関しては本稿の第3章第4節で論じる。

(2) この基礎的な文化の概念をintegralismの名称のもとに、ソローキン理解の鍵として定礎しようとしたのはフォードである(Ford, 1963, 1996)。

学的洞察」を繰り広げたソローキンの敏腕に驚きをあらわにしている（下程, 1977, 同前頁）。下程のいう「鋭い心理学的洞察」とは、「文化意識（cultural mentality）の型」に関するソローキンの所論を指している。いうなれば、あらゆる文化をすべからく規定している、つまり文化の大前提となっているのがこの文化意識である（第1図）。

図1 主な文化意識の型

感覚文化意識（能動的側面と受動的側面）

…1世紀から4世紀まで, 16世紀から現代まで

観念文化意識（禁欲的側面と能動的側面）

…5世紀から11世紀まで

理想文化意識

…12世紀から15世紀まで

犬儒感覚的文化意識

疑似観念的文化意識

（下程, 1977, 286頁-287頁, Sorokin, 1937 : I, 72-76をもとに筆者が作成）

「主な文化の型」と呼ばれるはじめの3つの文化を下程は順に説明していく。感覚文化とは、時期としてはローマ帝政時代や文芸復興の時代の文化に該当し、「実在するものは、目・耳・鼻・皮膚等で知覚される感性的なものだけで」、「アイデア・物自体・真実などというものは、全然あり得ぬ」との意識を持つ文化である（下程, 1977, 287頁-289頁）。この感覚文化には、「現在を楽しめ！（Carpe dime）」、「酒と女と歌と！（Wine, Women, and Song）」などを標語とする享楽に耽るという受動的な側面と、「財力・権力・名声」を獲得すべく外界や環境の改変に励むという能動的な面がある（下程, 1977, 288頁）。観念文化とは、およそ5世紀から11世紀ぐらいまでの文化で、西洋では特にキリスト教中心の中世時代がその典型である。いうなれば、「人間の根本要求を身体的欲望とする感性主義とはまるで反対に、精神的要求こそすべてであるとして、官能的欲求を極小にし、感性界から離脱し、自我をも完全に没却し、精神的な大宇宙に合一し、神の国または大自然に溶け込み、そこに自足円満にして、永遠な心の平和を享ける」（下程, 1977, 290頁）のが観念文化であろう。さらに上記の2つの文化を対極とすれば、それらのちょうど中間に位置する理想文化も

存在する。理想文化は「人間の身体的欲望の場を忘れぬとともに、人間の精神的要求の場をも併せて生かす中正・平衡・調和の地平を開く」（下程, 1977, 292頁）特徴を持つ¹³⁾。この概念的な文化の類型は第3章において具体例が提示され、鮮やかな色調を帯びるのであるが、今のところこの方面の研究はない¹⁴⁾。

3. 第4章について

これにつづく第4章については、おそらく博覧強記において同時代に比類を見ないであろう米田庄太郎が、「社会文化的変動の形式」（米田, 1937.12, 1938.3, 1938.4, 1938.5）と題して卓越した解釈を残している。これに先立つ論文「現代社会学に於けるパレト社会学の地位」（米田, 1937.5）にしてすでに、米田はソローキンに並々ならぬ関心を払っていた。そこではパレトに先んじるウィニアルスキーの学説が、主にソローキンの『現代社会学理論』（Sorokin, 1928, 23-29）に依拠して論じられ、「『数学的関数的』社会学として、力学的社会学を発展させること」（米田, 1937.5, 43頁）への期待が語られていた。おそらくその発展の行方を、米田はこの第4章に読みとったのであろう。日本において同書の意義を誰よりも早く察知し、ソローキンの規定の包括性と完全性をたんに称揚するばかりではなく、ソローキンが「大に重要視している社会的時間及び社会的空間の二概念に於いては、彼の規定はまた余程不精確である」（米田, 1938.5, 684頁-685頁）と弱点をすぐさま見抜いている。しかも「そうして私は其等の二概念に就て更に精確な規定を作ること、今後社会的文化的変動の研究をますます精確にするために、肝要である」と論を続けて、タルド、デュルケームら社会学者はもちろん哲学者であるベルグソン、ハイデガーらの名前さえも上げ、さきの「二概念」を明確にする糸口になるであろうことを示

(3) なお山本新は、観念的、理想的、感覚的な文化を、それぞれ「宗教の君臨する時代」、「信仰と理性のバランスを保っている過渡期」、ならびに「非宗教的な、無神論的な時代」をもって翻案しようとしている(山本, 1969, 274頁)。また宮崎信彦は、ベルジャエフのいう「新しい中世」とソローキンの「理念的文化」とを、「ことばは異なるが、近世の分析と評価、その特性と帰結において両者の思考はほぼ同一の方向を指している」と見なし、「宗教がはなはだ重要な地位を占める次の時代」の到来を予見していることに両者の類似点を見出している(宮崎, 1957, 31頁)。

(4) 筆者はこの第3章は比較宗教社会学としても読むに値する文献であると考えているが、それとともにソローキンの概念に生気を吹き込む役割をもっていることもあわせて強調しておきたい。ソローキンを概念的、抽象的であると評する批判者は、まずこの章を解説しておくべきであろう。

峻している（米田，1938.5，685頁）。しかも，ソローキンが後に『社会文化的因果関係・空間・時間』（Sorokin, 1943）⁽⁵⁾ で企てた，自然科学との対比においてこれらの概念をとらえるという視座も米田は彼に先んじて書き添えている。

他方，科学や社会学と哲学とを独自の仕方では区別する米田にとって，「社会学，社会哲学，歴史哲学又は其他何れの名称で呼ばれてもよい」（Sorokin, 1937: I, 173, 米田，1938.5，692頁）とするソローキンの曖昧な態度など容認できるはずもなかった。科学が経験により相対的な知識を獲得する方法であるとすれば，哲学は直観的な方法により絶対的な知識を探求するものであると米田は考えていたからである⁽⁶⁾。こうして「社会文化的変動の形式の研究に関しては，科学としての社会学の立場から見れば，ソローキンが包括的な又は最も優れたものであると認める。併し社会哲学の立場から見ると，夫れは其儘に直ちに承認されることが出来ない」と述べ，哲学を目指すのであれば，「無限的な永久的な方向」，「人間の自覚的な社会的文化的生活の絶対的指導原理」を見出すものでなければならないと米田は最終的な結論をくだすのであった（米田，1938.5，694頁）。

それでは次に，このような方法論を土台として展開された『社会的・文化的動学』の本論への言及を振り返っておきたい。

第2節 戦争論—第3巻第2部—

戦争論にあたる第3巻第2部は，宗像巖（宗像，1964）によって考察されている。宗像はまずソローキンの社会変動論について，「変動の原因を人間精神の基本的な振幅の中に求める点」にその独創性をみとめ，彼の理論を「これまでの経験科学としての社会学のすぐれた業績の上に，超経験的な精神活動に根ざす諸要素を付加して，社会学理論の中に，ふたたび，『生きた人間像』を取戻そうとする試みの一つ」であると位置づけた（宗像，1964，10頁）。つまり『生産中心の時代』が次第に過ぎ去る状況の中から発生を予想される精神的な深みを秘めた人間的課題の挑戦に社会学的に答えて行く可能性を包蔵した」（宗像，1964，同前頁）ソローキンの基礎視角が，ここで推重されているのであ

(5) この著作(Sorokin, 1943)については本稿第3章第1節及び第2節でも取り上げる。

(6) 米田庄太郎の社会学大系の構想については(銅直, 1964)を参照。

る。なかでもソローキンの真面目であると考えられている「基本的な文化類型と、数量化された各国の歴史的発展過程と比較された戦争現象との間の内的な意味的連関性 (Meaningful Relation)」(宗像, 1964, 12頁)の分析に、宗像は強く惹かれていたようである。ソローキンは社会現象を、時空を超えた精神的意味と物質的媒体の世界とに分け、それぞれを「意味的」連関および、「因果的」連関としてとらえた。そしてそのさい社会変動に見られる、現象の前後関係という「この特殊な因果過程の中で、その『原因として働きかけているもの』は主として、そこに含まれている内面的な『意味』である」(宗像, 1964, 15頁)とソローキンの真意を宗像は正しく別括した。要するにソローキンは経験的に観察できる現象の因果関係にまず着目し、次にその関係の内に見出せるであろう意味の探求に努力を傾注したのであった。

ソローキンがこの方法によって発見しえた命題は、宗像によって下のように点描されている(宗像, 1964, 16頁-18頁)。第1命題は、「Ideational Cultureが支配的な時代に発生する戦争は、Sensate Cultureが支配的な時代に発生する戦争よりも、宗教戦争、あるいは、なんらかの精神的理想を達成するための戦争(Ideational War)の特色をもつ傾向が強い。これに対し、Sensate Cultureの時代の戦争が宗教的ないし精神的色調を帯びることは希れである」(Sorokin, 1937: III, 373)。第2命題は、「Ideational CultureとSensate Cultureとを比較すると、いずれか一方の時代が、とくに他方に較べて戦争活動が烈しいことも、また、平和な安定期間であるということもない」(Sorokin, 1937: III, 375)。そして第3の命題は、「IdeationalからSensate、あるいは、SensateからIdeationalへの文化の移行期には、戦争活動の激烈が著しく増加する」(Sorokin, *op. cit.*)というものであった。

してみるとソローキンの戦争論は、「根本的には、歴史の中の人間の社会活動の足跡を、その内面的精神的な意味に則して読み取り、歴史的な人間の存在状況を、社会学的方法を介して、高く広い展望の下で包括的に描き出そうとすること」(宗像, 1964, 21頁)、これに尽きよう。そして「歴史の中に見られる社会変動の根本的な意味は、人類が超自然の絶対者の周辺を、その姿を求めて接近し、あるいは、その姿を見失って遠ざかり、さらに、再発見して近づいて行くといった、神対人間の精神的な対位法の中に求められ、具体的、表層的な社会変動過程の奥に、この対位法から生まれる独得の精神的メロディを聞き取

ること」(宗像, 1964, 同前頁), これこそが宗像が別快しえたソローキンの究極的な課題であった。

第3節 文化と文明—第4巻第4章—

『社会的・文化的動学』で用いられていた方法論の研鑽という役割を担っているのは、本編の4年後に出版された完結編 (Sorokin, 1941: IV) である。大坪重明は「所謂『文化二分理論』(dichotomic theories) に対するソーロキンの批判について」(大坪, 1967) と題して、この第4章「領域の文化全体は、様々な部分の中で一緒に、それとも独立に変わるのか」(Sorokin, 1941: IV, chap. 4) を議論の俎上にのぼらせている。

例えばわれわれは社会文化的現象を、一方では文明、物質、社会、技術、経済なるものに、もう一方では、文化、非物質、イデオロギー、思弁なるものに仮託して漠然と区別している。これが「文化二分論」の含意である。一顧すれば、この種の類別はソローキンとトインビーの相互批判という形で話題にのぼったことがある⁷⁾。トインビーは、物理学が歴史とともに発展していくのに対して、詩や芸術の場合は必ずしもそうとはいえないとソローキンに迫った (Toynbee, 1963)。以前ソローキンは、両者の変動の違いはおろか、截然と分断してしまうことにも反対していたからである。これを受けてソローキンは、かろうじて下の3点だけを反論として準備している。その3点とはトインビーが「物理学と詩との変化発展進歩の仕方に於ける差異を誇張していること」、ある文化での事例を「普遍的で恒久的に起こることのように見做している」こと、そして「優れる」という意味の曖昧さである (大坪, 1967, 284頁)。この反論が論破されない限り、あくまでもソローキンは自説に執着する心づもりであった。

こうした応酬にふれて大坪は、文化二分理論の一面観を浮き彫りにした有意義な論争であったことを讃えるとともに、おそらく統合理論を指してであろうが、二分理論に代わるソローキンの体系の卓抜さをも認めている。しかしソローキンに問題がなかったわけではない。大坪が懸念しているように、ソローキンの主張には以下の危険性が秘められている。1つはソローキンによるシステム

(7) なおソローキンとトインビーの関係については、本稿の第4章第2節でも論じる。

と集積との峻別が「文明」を否定しており、文明の中にある2側面の不調和による危機の発生という考え方までも消散してしまうおそれである（大坪, 1967, 286頁-287頁）⁸⁾。もう1つは「進歩が何を意味するか」とか、「それ〔進歩〕が他の文化領域や社会生活にどんな影響を与えるか」、あるいはまた「何故それが近代西洋に於て起って来たか」といった問題を回避してしまうことへの危惧である（大坪, 1967, 287頁）。

結局のところ大坪の見出した「ソローキンの理論体系に含まれる弱点」とは、ソローキンが言語、宗教、芸術、哲学などを、「主な文化システム（main cultural systems）」と呼び慣わし、これを抽象的に議論したことであろう。なぜならソローキンの体系からは、先に指摘した「二分理論に於ける価値ある要素」に含まれる2つの有効な思想をすくい上げることができないからである。言い換えれば、ソローキンの概念の抽象性により「現実の社会や文化の或る重要な一面が、巧妙にはりめぐらされた彼の概念の網の目からもれてしまった」点に大坪は理論の改善を求めたのであった（大坪, 1967, 291頁）⁹⁾。

本章では、ソローキンが統合主義を初めて全面的に押し出した主著に関する研究を検分した。以下ではこの統合主義が、ソローキンの付焼刃の想念でなかったことを検証するために、その後の著作における展開に目を通しておくことにしたい。

第2章 ソローキンの基礎領域

すでにフォードが裏付けているように、統合主義の「種子は農村社会学、都市社会学の著作の中にあった」（Ford, 1996, 87）。フォードの言説によると、

8) 「問題は総体文化の統一的体系の中での各文化領域に特有の意義（宗教の理念、科学の理念、経済の理念等）というやうなものを考へることがいけないのかどうか、ということであるのだが、ソローキンはこの問題を無視してしまっている」（大坪, 1967, 287頁）と大坪は見なしているが、もちろんこれは誤りである。確かにソローキンは各分野ごとの理念を認めはするだろう。しかしそれが支配的な文化意識と同調していない理念であれば、これを集積、雑居、寄せ集め、にすぎないと一蹴するにちがいない。

9) 以上のような方法論および応用に対する重要な批判が倉橋重史によって提出されている。批判点の第1はソローキンの文化類型の粗略さ、第2に類型の判断基準について。また第3に仮に判断基準が設定できたにしても社会や時代により基準が相対的でもあれば、第4に国別、年代別といった区分も曖昧であること。第5に現象の数量的把握にどのような意味を持つのかを明確にしなければならぬなど（倉橋, 1991, 41頁）。

ソローキンの統合主義は『社会的・文化的動学』以前の著作にもすでに胚胎していたことになる。このことが正しいとするなら、こうした事実拘泥しなかったこれまでのソローキン研究にも、知らず知らずのうちにであれ統合主義が何らかのかたちで露見できるのではないだろうか。そこで統合主義の視点をめぐるソローキンの基礎理論、わけても本邦で関心が向けられている彼の社会学観、農村社会学、社会移動論、ならびに社会的空間、時間、集団論を論じてみたい。

第1節 総合社会学

ソローキンの社会学は通常「総合社会学」、あるいはソローキン自身の言葉では、「統合社会学」と理解されているが、その内容はいたって単純なものである。例えばn個の特殊社会科学があるとすれば、それを統合する科学が必要であり、このn+1個目に相当するのがソローキンの考える社会学であった(Sorokin, 1928, 761)。つまりひとり社会学のみが、数ある社会科学の間に共通する特徴を通分野的に研究することができるのである。しかしこうした総合社会学の主張には、必ずといっていいほど「総合点なき総合」をめざす「ディレクタントイズム」であるとの酷評がつきまとう(尾高, 1949, 252頁-267頁)。しかしながら総合点が1つでなければならぬ必然性はない。むしろ肝要なことは、「ソローキンがいうように社会=文化現象の共通偏在の諸性質、諸関係、斉一性の研究は独自のあるいは部分的な諸特質や諸関係の研究と等しく甚だ専門化されたものである。それ故、総合化的性格であるにも拘わらず社会学は厳密に一専門科学となっている」(佐々木, 1978, 124頁)という事実である。ではこうしたソローキンの基本姿勢は、彼の考える社会学にいかにか組み込まれているのであろうか。

もとより社会科学は自然科学に範をとり発展してきたという一面があるが、ソローキンの場合はこうした風潮には真っ向から対立している。「ソローキンによれば、社会文化現象(これを普通われわれは社会現象と呼ぶ)は物理化学ないし純粹生物現象などの自然現象とは異質の特殊な構成要素をもっており、それゆえに、それを研究対象としている社会学はその性質にふさわしい独自性をもつべき」(松本, 1973, 4頁)ものであった。より微細に解析すると社会文化現象は、「(1) 非物質の無空間・無時間性の『意味』(meaning), (2) この意味を物質化し、外在化し、または具象化する物的な、すなわち、物理化学的な

いし生物的『媒体』(vehicles), (3) 物的な媒体に助けられてその意味を支え用い操る『人間主体』(human agents) の3構成要素から成り立っている」(松本, 1973, 同前頁)。しかもソローキンにあっては、「社会学の研究における第一義的な目標のなかにその現象の意味の理解」という課題がくっきりと刻まれていたのである(松本, 1973, 同前頁)。言い換えると社会現象には、主要な部分を統合している意味が存在し、これを解明するのが統合主義に依拠するソローキンの社会学の主題であった。

しかしそれゆえ直ちに、ソローキンが現象の因果的な探求を旨とする自然科学的方法を放棄したと考えてはならない。彼は因果的方法を意味論的方法と併用した因果-意味の関係を究明すべきことを、誰にもまして力説しているからである(Sorokin, 1937: I, 22ff)。

このような特徴を持つソローキンの社会学に対し、松本和良が批判を寄せているのは一考に値しよう。その批判とは、第1にソローキンが意味を人間の行為や社会的行為と結びつけずに、単独で存在するかのごとくに論じていること、第2に社会現象と文化現象、社会科学と人文学、社会システムと文化システムの区別にはそれほど重点を置かなかったこと、第3に方法論が静的であり、また循環論的運命論でさえあったこと(松本, 1973, 14頁-16頁)などである。この最後の批判点は、ソローキンの思考様式と弁証法の関連を探る上で興味がつきない問題を孕んでいるので次節において詳論する。

第2節 弁証法

最近ハンソンが、「ソローキンは彼の思考としては、理論的にも方法論的にも(「厳正」でも「単純」でもなかったが)、彼の統合主義の一部はアメリカ社会学の中であって、飛び抜けて、実質的に、意義深く、おまけに決定的に弁証法論者であった」(Hanson, 1996, 102)と結論しているのがこの問題に関する現代的な解釈である。この着眼はかつてマルクス主義社会学の立場からのソローキン批判を展開した北野熊喜男の「ソローキンの唯物史観批判について」(北野, 1952)、および早瀬利雄の「近代社会学とマルクス主義」(早瀬, 1972)などにも顕現している。

北野はまず「マルクス・エンゲルスの歴史観」を、「歴史的社会的現象における経済的要因の重視、いな進んでソローキン流にいへば、経済的要因をそこに

おける独立変数と」する判断が、ソローキンの『『純科学的』立場』、「総合的一般的社会学としての社会学の立場」であり、本当はこの立場にこそ「方法論上の根本的疑問がある」と非難している（北野、1952、6頁-7頁）。その疑問とはすなわちソローキンが、「あまりに多くを経験的 sociology に求めつつ、単に平面的計測的処理をもってこれを解決しようとしたこと、しかもそれゆえに、マルクス史観の根底にあるいわば立体的な本質的な存在の累層的構造分析のもつ意義に、完全に盲目であったこと」であった（北野、1952、11頁）。

とはいえ果たしてソローキンは「存在の累層構造」に無知であったのだろうか。もう一度ソローキンのマルクス批判を振り返っておく必要がある。第1に経済現象と非経済現象はマルクスが考えたよりももっと複雑であること、第2に社会現象と経済現象の相関関係は特殊事例であること、第3にそもそもそれらの完全な相関性が存在しないこと、第4に経済現象以外の変数も十分に考えられること、というのがソローキンのマルクス批判の概要であった（北野、1952、20頁）。

しかしこれをもって直ちに、ソローキンの学説がアメリカ的で、また調査一辺倒で、理論偏重であると決めつけることができるのであろうか。確かに「今やアメリカの社会学（というより実は社会調査）が如何に隆盛であるにしても、すなわち人びとがわれもわれもと写真機や計算機をぶらさげて、如何に綿密に地球表面のすみずみまでを調べ歩いたにしても、なおかつ『世界をその奥の奥で統べているものは何か』（フェウスト）それを少しも知ることは出来ないであろう」（北野、1952、11頁）との批判は真実を含んでいようが、これこそソローキンが批判してやまない研究態度ではなかったのか。しかもマルクスのいう弁証法の「反対の一致」を非難したのはソローキンに他ならないとしても、ソローキン自身はこの意義を十分に認め、そればかりか「反対の一致」などは後々まで愛用しているぐらいであるから、むしろマルクス批判はこういった概念を不用意に流用したことに向けられていたと見る方が穏当であろう。

したがって、ソローキンの体系ですら「それよりも巨大な統合的体系づくりはすでに百年前にマルクス、エンゲルスによって試みられたもの」であり、「その方法論的嚮導は史的弁証法的唯物論によって措定されたものである」と直観することのほうが、まだしもソローキンの概念を浮き彫りにしていよう（早瀬、1972、322頁）⁹⁰。

第3節 農村社会学

ところで日本におけるソローキンの研究は、ながらく彼を農村社会学者としてながらく記憶し続けてきた。これについては、『農村—都市社会学原理』の抄訳 (Sorokin and Zimmerman, 1929, 京野訳, 1940 [1977], 館訳, 1943) が流布されていることや、本書の「都市—農村二分法」の一覧表 (Sorokin and Zimmerman, 1929, 56-57) が学者間の共有財産として定着している事実などがその証左である¹⁰⁾。

そのソローキンの農村社会学の摂取に最も尽力したのが鈴木栄太郎である。1940年に上梓された鈴木の主著『日本農村社会学原理』(鈴木, 1940)は、ソローキンをはじめとする国内外の農村社会学をただ単に体系化しただけではなかった。これらを積極的に応用し、日本初の統一的な農村社会学を構築したとも断言できる、たぐいまれな労作なのである。本書に見られるソローキンの影響を抽出すれば、まず農村の社会構造に触れたソローキンの累積的コミュニティ (cumulative community) と機能的コミュニティ (functional association) の概念規定 (鈴木, 1940, 85頁-95頁), 「ソローキンの農村に於ける家族及び家族本位体制の研究」(鈴木, 1940, 116頁-136頁) に関する一節, あるいは鈴木独自の「自然村」の着想のもととなった「ソローキンの農民社会成層の理論」(鈴木, 1940, 569頁-574頁) などが筆頭にあげられよう。とりわけ従来のアメリカ農村社会学者が曖昧に用いてきた「農村コミュニティ」(rural community) の語を、累積的コミュニティと機能的アソシエーションとを対比させ理解を促したことは、農村社会学に「必ずや決定的進路を与える」重要な概念であった (鈴木, 1931, 134頁, また1932)。端的に言えばソローキンの方針とは、「農村を絶えず都市に結びつけ」、「都市化 (urbanization) の過程の上に農村を研究」することである (鈴木, 1933, 308頁)。また、都市と農村を対概念としてとらえ、これらを総合することで社会現象をとらえるという視点こそが、さきのフォードの引用文中にある統合主義の「種子」に該当することも言い添えておこう。

10) ソローキンの理論と弁証法との親近性についてはすでに検証がなされている (Hanson, 1996)。

11) 鷹田和喜三はアメリカの農村社会学を北海道の開拓村へと応用し研究を一步進めたが、これらは鈴木栄太郎らの業績や上掲訳書などのソローキン研究の業績を足掛としてはじめて達成しえたものであると考えてよいだろう (鷹田, 1972, 1975, 1984, 1986)。

第4節 社会移動論

1. 『社会移動』について

日本におけるソローキンの社会移動論の研究は、農村社会学に劣らず盛んに行われている。てはじめに『社会移動』(Sorokin, 1927)の副読本としても読むに耐える「P. A. ソローキンの社会移動論とその再検討」(川合ほか, 1982)を取り上げてみたい。そこではまずソローキンの巨視的立場が、「社会移動論の視座から、問題関心と方法論における二重の意味での包括化、総合化を図ろうとした」(川合ほか, 1982, 93頁)のものであると判断され、ひきつづきその問題点についての論及がなされている。以下、論文の骨子だけを描出しておく。

『社会移動』第1部は、その「余りに巨視的な視座」のせいで、概念や尺度が「きわめて抽象化されて曖昧」なものとなっており、しかも「経済的成層、政治的成層、職業的成層」の諸概念の「相互の連関も明確にされていない」ことで批判されている(川合ほか, 1982, 同前頁)。第2部については、「個人の移動と社会的物事、価値の移動との理論的関連が不明確」なこと、および分析がソローキンの意図に反して静態的であることなどが明示され、同じことは第3部でもいえるとしている(川合ほか, 1982, 同前頁)。第5部と第6部についてはソローキンの「エリート主義志向や貴族主義志向が顔をのぞかせている」と難じている(川合ほか, 1982, 94頁)。総評としては「特に機能主義的成層論、歴史科学についての認識、命題定立・仮説設定の諸方法などをめぐっては問題があり論争点でもあり、評価も別れるところである」との評言が付与されている(川合ほか, 1982, 同前頁)。つまりここではソローキンの理論と対象という側面の「二重の意味」での包括性については前向きに評価され、とりわけ社会移動と社会変動を同時に論じる「移動効果論」(Sorokin, 1927, chaps. 21-22)などは、今でもなお検討に値する卓論であったことが揚言されている²²。

2. 社会移動の主体

上述のように従来の人口移動研究に比べ「ソローキンは、彼に先行する諸学者よりも大きい外延をもつところの<社会移動>なる概念を設定し」、「このこ

22 なお、ソローキンの移動効果論については三浦典子(1982)が、また移動の原因論に関して長尾周也(1967)が、それぞれ論及している。

とが、それまで相互の関連が見失われていた複数の現象に対し、統合的な視野を提供した」(安田, 1971, 37頁)と特長づけることができる。その上で「批判的に検討」すべき次なる論点として安田三郎⁹³は「移動の主体」、「社会的空間の観念」、「社会階層の観念」に見定めている(安田, 1971, 48頁)。とくに「移動の主体」の問題は、ソローキンの評価のみならず、社会移動研究の本義にも大きく影響し、実際、研究者間の特質の違いとなって露見している。問題の核心は、ソローキンが「社会的物事」(social object)と呼んだ社会移動の主体を、「個人」のみに限定するのか、それとも「意味や価値」にまで拡大するのかのいずれを取るかの違いにある。大きな概念を採用した場合には、例えば次のような相反する評価を生む原因となる。すなわち一方では、旧来の社会移動研究が「異なった概念を用いて、相互にほとんど無関係に進行していたのを、社会移動という新しい概念を採用して1つに総合した」と評価されるかと思えば、もう一方では「余りにも包括的な範囲における一般化は、もしそのためにあいまいさを増すとすれば、何の意味もない」と貶価されたりもする(安田, 1971, 551頁)。こうした曖昧さを嫌う論者は、「社会的移動とは、個人の社会的地位の移動である」(安田, 1971, 同前頁)との狭隘な定義を行う。

この主体を個人のみに制限した定義を見ておこう。山本登は「社会移動の概念—ソローキン説の批判を中心として—」(山本, 1950)において、社会移動の概念と実体とは画然と区別されるべきものであると提言し、次のように論じる。ソローキンのいう「社会的空間」は、分析概念としての有効性を認めることができても、同時にこれを「地球上の全人口の相互関係によって構成されている宇宙として一種の実在性をもっている」と承認することはできない。また同様に社会的空間の垂直的、水平的次元の設定については、実際の階層を想定すれば、「人々がビルディングやピラミッドのような立体的な関係を構成していると考えることはできない」と山本は指摘している(山本, 1950, 273頁, [1984, 73頁-74頁])。つまり山本の念頭にある「垂直的水平的次元」とは「比喩以外の何ものでもない」、実体的な把握が不可能な概念であった(山本,

⁹³ なお彼はソローキンの「社会移動」という用語自体の初出箇所をもつきとめている。それによるとソローキンはパークとパーヴェスの共著(Park and Burgess, 1921)に着想をえ、『革命の社会学』(Sorokin, 1925, 231)で初めて用いた(安田, 1971, 35頁)。

1950, 274頁, [1984, 74頁])。こうして山本がたどり着いた結論は、社会移動研究とは社会関係の位置的关系を「量的関係」として把握すること、という限定された認識におちついた(山本, 1950, 274頁, [1984, 75頁])。それというのも、「社会移動の主体」は実体概念を基本線とする「人間」にはかならず、文化や価値の移動というものが仮にあったとしても、結局その運び手は人間にすぎないと山本は仮想していたからである(山本, 1950, 288頁-289頁, [1984, 86頁-87頁])。

そこで導出される山本の定義を最後に確認しておけば、社会移動とは「人々の社会的位置の変化」であり、この「社会的位置とは上下関係を量的に把握する場合理解される概念である」ということに収束する(山本, 1950, 290頁, [1984, 87頁])。いうまでもなく、この定義はソローキンの社会移動論の利点であった包括性を放擲してしまうことを意味する。

3. 「社会的物事」の移動

しかし安田や山本の見解とは異なり、移動の主体にソローキンの意図どおり文化や価値をも包含させ、なおかつ新たな知見を披露する研究も現れた。これが『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』(鈴木編, 1978)である。鈴木広は理論としての社会移動論を整理し終えたあと、「コミュニティ・モラル」という独自の視点から社会移動と社会変動の連動関係を実証的に追求し独創的な成果をあげた。理論構築の過程ではソローキンの学説が主要な位置を占めており、ソローキンに寄せる鈴木の関心の程をうかがわせている。ソローキンが「社会的位置」を『「社会的空間」のなかで、したがってさまざまな社会関係の交錯』のうちに確定したこと、そしてその基準として「上下的と水平的」な「座標軸」を考案したことに、鈴木を強く惹きつけさせるところがあった。これらを摂取して個人の「社会関係の独自の総体」と「社会や階層やコミュニティ」の「独自の総体」とを関連づけることで、「社会的地位」をとらえなおしているのは、ひとえに鈴木の新見であったとみなしてよいであろう(鈴木, 1968, [1969, 233頁, 1970, 49頁])。

第3章 ソローキンの基礎理論

第1節 社会的時間論

『社会的・文化的動学』執筆の後、ソローキン独自の社会学方法論を開示した『社会文化的因果関係・空間・時間』(Sorokin, 1943)は、それほど有名ではないが社会科学を自然科学との対比においてとらえ、両者の交流の困難さを論じた名著である¹⁰。わが国では倉橋重史がいち早くその真価を見極め、このほかソローキンの社会的時間論と社会的空間論とに矚目している。

これまでの時間論では進化論、ないしは進歩の法則を基礎に「生物体をもつ固有の運動と律動、活動をもつ一定の周期と社会有機体のそれら」との比較において考察がなされてきた(倉橋, 1969, 39頁)。これらは「直線的進化論」と総称されているものなのだが、ソローキンの社会的時間論にはこうした簡略化された見方を改善する要素が含まれていると倉橋は考えた。この社会的時間をここで一瞥しておきたい。

倉橋の整理によると社会的時間とは「人間の对人的行動や関係・集団などにみられる固有のリズム, 周期性」, そして「社会的に体系づけられ意味づけられた時間」を意味し、さらにこれらとは別に両者の関係を示す「第三の社会的時間論」とに分けることができる。つまり「社会的時間論の主題は社会的事象と現象に固有な時間体系を見出すことと、時間の社会的連関性を明らかにすること。および両者の連関自体の解明にある」(倉橋, 1969, 41頁)と倉橋は看破している。ソローキンは時間を「(1) 物理・数学的時間, (2) 生物学的時間, (3) 心理学的時間, および (4) 社会・文化的時間」¹¹にわけ、社会学にあっ

¹⁰ 他の理論書としては「単なる叙史的な社会学を越えて、一種の総合社会学(一般社会学)の体系を展開している」『社会・文化・パーソナリティ』(Sorokin, 1947)があり、これは「彼の過去の研究の総決算を看取するとともに、総合社会学者としての彼を見出すことができる」(大道, 1954, 297頁)。総じて、「特殊社会学」への追求が甘いけれども「本書は一般社会学の体系的展開の書として注目値する」し、「また最近の水準(たとえば、文化社会学、パースナリティーの研究)をよく摂取している」と評価してよいであろう(大道, 1954, 同前頁)。

¹¹ 倉橋はソローキンが分類した4つの時間のうち、社会的時間だけが学問の対象としての時間という意味ではないような意味合いにとれるところがあることを指摘し、他の分類を数学的、生物学的、心理学的と定めたのであれば、当然(4)は社会学的時間、ないしは社会科学的時間に改めるべきことを提案している(倉橋, 1969, 48頁)。

ては社会的・文化的時間が中心的な課題であることを強弁した（倉橋，1969，41頁-42頁）。それはあらかまし下に記しているような根拠による。すなわち第1にそれぞれの時間が，固有の機能と関連性をもっていること，第2に時間はこの概念のいずれかに属し，社会的・文化的環境に条件づけられていること，第3に社会・文化的時間は，他の時間とは性質も機能も全く違うこと，さらに第4には社会・文化的時間が，社会的・文化的環境を直接反映していること，そして第5に社会・文化的現象の説明は，社会・文化的時間の概念なくしてはありえないこと，などが上げられている（倉橋，1969，43頁）。

ところで社会的時間は社会文化現象の継続時間，同時性，連続，変化の指標であり，これらは各集団ごとに異なる早さで流れていることも事実である。したがって，社会的時間を無限に分割することは不可能である。あるいはまた質的，能率的であることも社会的時間の特徴の1つで，そこには永遠（*aeternitas*），世代（*aevum*），時（*tempus*）などの局面がある（倉橋，1969，44頁，また1993，5頁も参照）。こうした特性を考慮に入れてみると，量的時間による社会現象の説明には次のような難題が包蔵されていることが明らかとなろう。例えば事象の前後関係は量的には表現できないし，現象間の時間の間隔は，先行する起点としての時間が確定されていなければならないこと。あるいはまた，時間の社会的意味が剥脱されていたり，過程を数学的時間で句切ることで社会的現実が空虚となったり，ひいては生命なきものとなったりすることもある。さらに全く違う社会現象を同一のものと見誤ったり，現象自体の意味がなくなってしまうたり，現象間の意味的，あるいは因果的な繋がりをとりそこなってしまうたりすることなどが考えられる（倉橋，1969，45頁-46頁）。以上のような特徴を持つ時間認識の方法は，論理の構造からすると次節で論じる社会的空間論の展開の仕方とそっくりである。

第2節 社会的空間論

ソローキンはまず最初に「空間を1）物理的・数学的空間2）生理学的空間3）心理学的空間4）社会・文化的空間」に区分し，なかんずく社会・文化的空間が自然科学や心理学とのアナロジーでは解釈できないことを首唱している（倉橋，1974，7頁）。社会的時間が物理的な時間と異なっていたように，社会的空間も幾何学的空間のような均質の空間ではないというのがその力点である。

倉橋によるとソローキンは「社会的現象の意味を重視」し、「意味の位置は意味の世界のなかではじめて決定される」と見ているが、さらにこの意味を構成している要素としては「意味の手段」、「意味を運ぶ媒介物」、「人間主体」の3要素を選出している（倉橋, 1974, 6頁）。社会的空間の特徴を略説すれば、「1）人々の世界であり、2）個人の社会的位置は人々の全ての集団に向かう関係および集団の内における関係、その構成員に向かう関係の全体であり、3）この社会的世界における個人の位置づけはこれらの関係を確かめることによって判明し、4）このような集団の全体とこれらの各々のなかでの位置の全体は社会的な整合のシステムを作りあげる」ものである（倉橋, 1974, 10頁, Sorokin, 1927, 6）。つまり社会的空間とは、人間に特有の世界であり、ある個人と別の個人や集団との関係を各自で確認しあうことによって形成されたシステムのことである。

しかしソローキンが指定する「社会的空間の多次元性と異質性は、例えば社会的位置の決定にかんしても準拠点として選ぶ基準が明確でなく、準拠点として人間ないし社会現象を選んでもそれらの現象に対しての相対的位置関係しかとらえることはできない」という疑問も当然浮かんでくことであろう（倉橋, 1974, 11頁）。倉橋によると、第1にソローキンの概念は「抽象的一般論」であって、社会現象の把握には限定が必要であること、第2に彼が質と意味に関わる社会的空間と他の空間との違いを強調しすぎており、その結果、異なる空間の関係を軽んじてしまっていること、第3に「社会的空間における手段には技術の問題がとりあつかわれていない」ことなどが、これから改めるべきソローキンの難点であろう（倉橋, 1974, 同前頁）⁶⁶。

第3節 社会集団論

それでは次に、ソローキンが展開した集団に関する議論を振り返っておきたい。いうまでもなく「集団」は社会学の研究対象の1つとしてすでに確立されているが、清水盛光はそのなかでも特に「集団の本質とその属性」をソローキンの集団論に依拠して議論している（清水, 1959）。そこではソローキンによる組織集団と無組織集団の2区分が着目され、特に前者の「有意味的相互作用

⁶⁶ なお倉橋にはその他のソローキン論として（倉橋, 1993, 1991, 1994）などがある。

用のうちに、組織集団の本質を求め」る姿勢が、ソローキンの集団研究の課題であったとしたうえで、「有意味的相互作用の中には、因果機能的な依存関係とともに、有意味的な依存関係が存在し」ているのだという概念規定を行った(清水, 1959, 8頁)。意味と因果という2つの依存関係は、いかなる集団の中にも発見できるものであるのだが、ソローキンがとりわけ重視するのは、もちろん有意味的な関係のほうである。この関係を備えてこそ「孤立した個人の総和とは異なる、新たな一つの全体を成しつつ存在するもの」、すなわち「有意味的相互作用」といえるのである(清水, 1959, 9頁)。このような評価は清水の名著『集団の一般理論』(清水, 1971)においても受け継がれていく。そこでは、ソローキンが集団を「意味的相互作用にもとめ、しかも相互作用のうちに働く意味を、集団の結合紐帯と見るとともに、その意味が一組であるか、二組またはそれ以上であるかによって、集団を単結合紐帯集団(unibonded group)と、多結合紐帯集団(multibonded group)」に分けた、という具合に理解が深められている(清水, 1971, 165頁)。

ところで清水が着眼したこの統一性、体系性、全体性といったものは、のちにソローキンが頻繁に用いた「意味-価値-規範」という用語と、ほぼ同じものである。これを理解しておかなければ、統一性を見あたらない集団をソローキンが無組織集団と呼び、その例として「公衆、群衆と妄執、半名目的複数体」の4つを列挙していることの意味を誤解してしまうであろう。例えば清水が「群衆や暴衆がかりに組織や規範を欠いているとしても、それに、意味まで欠けているということが出来るかどうか」と疑義を挟み、くわえて「意味」ならば群衆にも存在しているのではないかの疑問を投げかけている(清水, 1959, 10頁)。しかし、ソローキンは「意味-価値-規範」を当該社会の「支配的な」という限定を付して用いており、より厳密に言えば、それらは観念、理想、感覚のいずれかを根本原理とするところの「意味-価値-規範」であるものだから、その限りにおいて群衆は意味を欠いているということができよう。このことを読み落としてしまうと、ソローキンの基礎概念である「意味-価値-規範」、「文化」、「統合システム」といった類似の語句さえも曲解してしまいかねないので、あえてここに付記しておきたい。

第4節 利他愛研究

最後に以上のような多彩な基礎理論を土台に醸成されたソローキンの利他愛研究を、とらえ返しておきたい。社会学者としては異色とも思われるこの利他愛研究は、一体ソローキンの胸中ではどのような位置づけがなされていたのであろうか。「ソローキンにあっては、人類と人間との社会的現実における究極的課題としての、実践の問題としての、愛他的愛が研究の課題とされている。人間と社会とは実践するものである。したがって人間科学、行動科学としての性格をもつ社会学にとって、ソローキンのいう愛他的愛の研究がその重要な課題の一つである」（今崎、1967、37頁）と今崎秀一は説明している。これは一種のパーソナリティ研究であるといえよう。ソローキンは現代の「社会的現実」を危機的状況と認識し、その危機の淵源を統合されていないパーソナリティに求め、パーソナリティの統合という「究極的課題」を「利他愛」の実践を通じて達成していこうと企図していたのである。

具体的には現在を「感覚的な」時代と見なし、これに起因する経済的、政治的、文化的な困難の解決にあたるために、ソローキンはハーバード大学に「創造的利他主義に関するハーバード研究センター」を開設するに至った（細川、1977a、295頁）。同センターの課題とするとところは、第1に「非利己的な創造的愛の作業定義を描き、方式化すること、ならびに現代科学でこの問題のおかれている立場を発見すること」（細川、1977a、298頁）、第2に「利他愛の形成と変容の効果的な技術と因子を調べること」（細川、1977a、302頁）である。

利他愛の実質的な内容については、ソローキンの「愛のエネルギー論」を「社会を構成する中心的な結合力」とであると看破した細川幹夫が詳しく論じている（細川、1985、472頁）。ソローキンのいうこの結合力こそがパーソナリティに他ならず、これは「(1) 生物的無意識（潜在意識）、(2) 生物的意識、(3) 社会文化的意識、(4) 超意識」の4層構造をなしている（細川、1985、472頁-423頁）。ここでフロイトらの精神分析学が看過している「無意識」と「超意識」の境界に細川が注意を喚起したことは、決定的な意味を持つ。実のところ説明が困難かとも思われるこの「超意識」こそが、「本来の愛」ないしは「普遍的な愛」の発露となるべきものであることを、むしろ現代社会の非本来的で偏った愛への批判を込めてソローキンは強調したのであった（細川、1985、474頁-476頁）。そして来るべき社会がこの「普遍的な愛」によって統合され、そこか

ら創造的は文化が生まれることをソローキンは信じて疑わなかったのである。

第4章 ソローキンの批評態度

さて以上のようにソローキンの主著、基礎領域、そして基礎理論を、あくまでも日本社会学史のとらえきれた範囲で論じてきたわけだが、次に統合主義に執着する彼への批判と反批判をみておこう。言うまでもなく彼とは相容れぬ立場に立つ論者への批判も痛罵を極めていくのは避けられないことであった。当然招来するであろう反感にも臆することなく、徹底的な批評態度を固持し続けたソローキンのそうした一面を最後に素描しておきたい。

この彼の態度をはっきりと表出しているのが、記念論文集『ソローキン批評』(Allen ed., 1963)である(馬場, 1964, 1992)。本書と自伝『長い旅路』(Sorokin, 1963)とから推察して家坂和之は、「ソローキンにおける謙虚と不遜、明澄と暗澹、和合と敵対、喜びと悲しみの対立と矛盾。しかし、この対立や矛盾の合一 *coincidentia oppositorum*あるいは *misterium tremendum et fascinans*としての実在の把握こそ、ソローキンの哲学—インテグラリズム—の目指すところでなければならなかったのである」(家坂, 1965, 492頁)、と彼の根本思想を的確に描出している。ここではソローキンが特に厳しい批判の矛先を差し向けたトインビーおよびパーソンズ、そして彼らが生きた時代そのものへの批判を振り返っておきたい。

第1節 パーソンズ

ソローキンとパーソンズとの関係を知る上で重要な論文は、ソローキンの記念論文集にパーソンズが寄稿した論文「キリスト教と現代産業社会」(Parsons, 1963)である。このパーソンズの論文は、ソローキンの有名な観念的、理想的、感覚的な文化の変動論に対する己の見解を初めて表白したものであった。そこでは「ソローキンがプロテスタンティズムを、中世カソリシズムに対比して、明らかに宗教性の全般的衰退の重要な一段階とみなし、また啓蒙主義の時代以降顕著になった世俗主義を、同じ方向への当然のさらなる段階と考えている」(Parsons, 1963, 36, 高橋, 1986, 300頁)と見なされている。つまりパーソンズの目からすると、ヴェーバーの世俗内禁欲をソローキンが正しく評価し得ていりるようにはどうしても思えなかったのである。ヴェーバーと同様、

パーソンズの考え方からしても、「18世紀以降のキリスト教の世俗化過程を『キリスト教倫理の制度化』のさらなる拡大過程として把握」（高橋, 1986, 301頁）しなくてはならない。この発言の重要性を確かめるために、もう少し敷衍しておきたい。

俗に現代社会は専門化、構造分化の時代だと形容されるが、宗教とてその時流にあらがうことはできない。つまりここに宗教の世俗化という問題がある。この現実を前にしてパーソンズは、世俗化は宗教の衰退を意味しているのではなく、それどころか以前にも劣らず多方面に分化したサブ・システムを統合する役割を宗教が担うようになった、という現状認識を行った。これによってパーソンズの宗教観や宗教の世俗化の意義と、ソローキンのそれとの間に、懸隔の違いが感じ取られよう。いうなれば世俗化の浸透により現行の宗教の影響力の強さを証拠づけているのがパーソンズの立場なら、それを宗教の衰退と見るのがソローキンであった。このソローキンとパーソンズとの世界観、宗教観の相違こそが、両雄の個人的、学問的な対立を生み出したそもその根源であったのである¹⁷⁾。

第2節 トインビー

家坂和之は、「トインビーの歴史的社会的変動理論がそれを支える基本的思考においてソローキンのそれと著しく類似するある要素をふくむ」（家坂, 1955, 142頁）ことを認め、これを基軸にソローキンを読解している。ソローキンによるトインビー批判の焦点は、大別して第1に文明ないし全体文化（total culture）の構造、第2に文明ないし文化体系の生成発展の要因、そして第3に文化の伝播に向けられていた（家坂, 1955, 同前頁）。

まず第1の点についていうと、トインビーは統合の見られない単なる集積を含めた文化全体を総称して文明と名付けたり（Sorokin, 1941: IV, 150）、また社会システムと文化システムとを混同したりしている（Sorokin, 1950, 214-217）。またトインビーのいう「文明の消滅」が、文化システムの崩壊を指しているの

17) マートンとソローキンとの意見の不一致についても、同根の理由が介在しているように思われる（Merton, 1996, 21-28）。これについてはマートンのソローキン論（Merton, 1963）および（有本, 1987）を参照。

であれば、これはありえないとソローキンは断言している (Sorokin, 1950, 225-226)。これをうけて家坂は、トインビーの文明がソローキンの文化と社会の性格を合わせ持つものであるのだとすれば、むしろトインビーのいう「文明の死」をソローキンのいう「社会集団の消滅」に置き換えて、積極的に評価したらどうかと提案している (家坂, 1955, 179頁)。

第2の難点は、「文明の成長」に関するトインビーの定式についてであった。簡単にいえばトインビーの考える文明成長の要因は、条件の良い自然環境、創造的少数者の存在、そして「挑戦と応酬」である。これに対するソローキンの批判は、「条件の良い自然環境」という表現が曖昧なこと、また仮にそのような条件が揃ったにしても、文明の成長とは直接に結びつかないこと。そして人種の遺伝的要因を否定することでトインビーが想定しえた「創造的少数者」の発生源をたずね、あわせて創造的たりえた理由を説明できなければならないとソローキンは主張している。しかも、いかなる社会や文化といえども不断に刺激を受けているので、「挑戦と応酬」をもって文明の成長の要因とするわけにはいかない。これに代わるソローキンの文化発展論は、発展の根本的な原因として、まず遺伝的資質を有する創造者、次に当の社会が新しい文化体系の創造を待望していること、そして最も大切なものとして多様な文化交流の接合点であること、この3つをあげている (家坂, 1955, 180頁-189頁)。

ソローキンによる第3の非難は、文化の伝播と移動に関する考え方に向けられていた。トインビーにとって、文明とはその成長期に全面的に他の社会に移植され、解体期には部分的にしか伝播されないものであった。しかしソローキンは、たとえ文明に成長と解体があるにしても、伝播の仕方は文明を所有する集団の移動に限られ、それが移動先の他の集団にまで移植されることはないことを非難した。

とはいえ、こうしたソローキンの批判めいた口調にもかかわらず、虚心に両者の意見を照合してみると、家坂が見出したように、かなりの一致点を確認できるのも事実である。したがってソローキンの批判を逆手にとってトインビーの主な論点を明確化することに成功した家坂の論法にならい、ソローキンの数々の批判を、よりよい理論を構築するための素材として活用していくことの方が有益であろう。

第3節 時代への警鐘

最後にソローキンの批判が最も徹底していた、彼の生きた時代そのものへの弁駁を再考しておきたい。ソローキンが同時代に警鐘を鳴らす啓蒙書を世に問うたのは、『現代の危機』(Sorokin, 1941)が初めてである。

「ソローキンの解釈によると、現在の文化は危機に直面してはいるが、つぎの文化に対して何か継続的発展がある。底に流れている生命力というか、文化力というか、何か一貫しているものがある。だから根本的に形は変わっても、西洋文化、西洋社会としては亡びないものがある」(大道, 1958, 62頁)。これがソローキンの信念である。本論の内容は『社会的・文化的動学』と同一なので、ここでは白田貴郎による批判点だけを取り上げることにする。

本書はまず第1に、宗教の世界的基盤の問題を曖昧にしている、言い換えれば多種多様な宗教の共通性を強調しているが、異質性を指摘していない(白田, 1967, 29頁)。第2に歴史理解における空間性を重視するあまり、時間性の方を軽視してしまっていること。つまり近代文化の形成が、中世文化の桎梏を打破して生まれてきたものであるとの認識が弱いと白田は見なしている(白田, 1967, 29頁-30頁)。さらに第3には、文化主義からくる社会機構の把握の脆弱性、すなわち「何故そのような結果が生じたのか、それを作り上げている原因は何であるか、について社会的存在論的な分析」が手薄である(白田, 1967, 30頁)。第4に厳しい現実の前では、利他主義がもろくも蹂躪されてしまう危険性がある(白田, 1967, 30頁-31頁)。そして第5に「真実の利他主義は、その『利』そのものを脱落すべきものであり、そこに自と他の対時的区別は脱落される」(白田, 1967, 31頁)。というのが本書に対する白田の批判の概要であった。

むすびにかえて

それではむすびとして、ソローキン研究を力強く推進してきた論者を幾人か名前を挙げ、彼らが日本社会学史上どのような意味を持っていたのかを考えてみたい。日本社会学史におけるソローキン研究への貢献の度合からすると、筆頭に布川孫市(静淵)、米田庄太郎、鈴木栄太郎、馬場明男、山本新といった人たちが思い浮かぶ。末尾に付した「日本におけるソローキン研究文献目録」でも明らかのように、極めて早い時期にソローキンを熱心に紹介しつづけたの

は布川である。彼は1920年前後に文明論的色彩を濃厚にしていったと言われている（川合，竹村編，1998，118頁）。それは20年代から30年代にかけて情熱をそいだ彼のソローキンへの傾倒とも無縁ではあるまい。

米田庄太郎は、いうまでもなく1910年以降の日本社会学を支えた中心人物であるのだけれども、それとともに日本のソローキン研究の立役者でもあったといえるのではないだろうか。鈴木栄太郎や山口正が京都帝大の大学院でこの米田に師事していたこと、また馬場明男の場合は、米田の最初期の生徒であった円谷弘（1888-1949）を指導教官にもったこと。つまり米田とその門下生達を中心にソローキンは論じられてきたのである。なお米田門下の高田保馬にはそれほどソローキンからの影響はみられないが、彼のもとで家坂和之、大道安次郎が育っている。こう考えると、日本社会学史の一齣を飾る米田らの功績を振り返る際に、彼らのネットワークとソローキン研究とのかかわりあいに関連づけることも興味ある課題のひとつであると言えよう。

さて本稿で取り上げることができなかった諸論考については、本稿の末尾に付した「日本におけるソローキン研究文献目録」の参看を乞うよりほかない。とはいえ、こうしたソローキン研究の回顧が、ひいてはソローキンの全体像の解明に寄与するとともに、大極的には日本社会学が形成過程で盛り込んでいった、社会学的知の要素を解析することにも通じるであろうと筆者は信じている。

〔文献一覧〕

*この文献一覧は、「1. 日本におけるソローキン研究文献目録」および「2. 参考文献」に分かれている。「1. 日本におけるソローキン研究文献目録」は、日本社会学史におけるソローキン研究の足跡を一望できるよう年代順の一覧表とした。「2. 参考文献」は人名順に記してある。

1. 日本におけるソローキン研究文献目録

1920年代

服部之総，1926.4，「ソローキン『革命の社会学』」（日本社会学会編輯『社会学雑誌』第24

号, 93頁-95頁).

山口正, 1927.9, 「現代ロシア社会学」(日本社会学会編輯『社会学雑誌』第41号, 66頁-93頁).

布川孫市, 1928.6,7,8, 9, 「現代の社会学説(ソローキンの新著を読みて)」(丁酉倫理会編輯『丁酉倫理講演集』第308, 309, 310, 311輯, 78頁-101頁, 34頁-66頁, 72頁-98頁, 32頁-74頁). *ただし署名は静淵.

林恵海, 1928.6, 「ソローキン氏の『社会的流動に関する研究』」(日本社会学会編輯『社会学雑誌』第50号, 88頁-96頁).

米林富雄, 1929.2, 「ソローキン著『現代社会学説』」(日本社会学会編輯『社会学雑誌』第58号, 89頁-92頁).

布川孫市, 1929.2, 「二十世紀における露西亜の社会学」(丁酉倫理会編輯『丁酉倫理講演集』第316輯, 111頁-122頁). *ただし署名は静雄子. Sorokin and Zimmerman, 1929 chap. 27の抄訳.

布川孫市, 1929.3, 4, 「社会及歴史的過程の循環概念(上・下)」(丁酉倫理会編輯『丁酉倫理講演集』第317, 318輯, 120頁-131頁, 103頁-112頁). *ただし署名は静雄生.

布川孫市, 1929.11, 「農村社会学の研究」(丁酉倫理会編輯『丁酉倫理講演集』第325輯, 67頁-85頁). *ただし署名は静淵.

1930年代

米林富雄, 1930.5, 「ソローキン『都鄙社会学原理』」(日本社会学会編輯『社会学雑誌』第73号, 88頁-90頁).

布川孫市, 1930.7, 「高度都会化社会の将来」(『丁酉倫理會倫理講演集』第333輯, 103頁-114頁). *ただし署名は静淵子.

小山隆, 1931.3, 「職業層より見たる人口周流」(高岡高等商業学校調査課編『研究論集』第3号, 203頁-243頁).

鈴木栄太郎, 1931.7, 「ソローキンらの『農村社会学資料類纂』」(日本社会学会編輯『季刊社会学』第2輯, 124頁-146頁).

池田善長, 1931.11, 「農村社会学に於ける基礎的諸問題について」(北海道帝国大学法経会編『法経会論叢』(第3輯, 56頁-71頁).

鈴木栄太郎, 1932.7, 「農村社会学上の一研究」(日本社会学会編輯『季刊社会学』第4輯, 156頁-163頁).

- 杉野忠夫, 1932, 「ジンマーマンの農村社会学」『農業経済研究』第8巻, 第2号, 117頁-134頁).
- 鈴木栄太郎, 1933.2, 『農村社会学史』(刀江書院).
- 池田善長, 1937.3, 「農村信仰の諸問題—ソロキン及び其の学派の所説に就いて—」北海道帝国大学法経会編『法経会論叢』(第5輯, 94頁-122頁).
- 米田庄太郎, 1937.5, 「現代社会学におけるパレット社会学の地位」(京都大学『経済論叢』第44巻, 第5号, 33頁-52頁).
- 米田庄太郎, 1937.12, 「社会文化的變動の形式(1)」(京都大学『経済論叢』第45巻, 第6号, 762頁-779頁).
- 井森陸平, 1938, 「農村社会学の学説と其の批判」(村落社会学会編『村落社会の研究法』, 刀江書院, 31頁-60頁).
- 米田庄太郎, 1938.3, 「社会文化的變動の形式(2)」(京都大学『経済論叢』第46巻, 第3号, 387頁-403頁).
- 米田庄太郎, 1938.4, 「ソロキンの文化的變動形式論—社会文化的變動の形式(3)—」(京都大学『経済論叢』第46巻, 第4号, 499頁-510頁).
- 米田庄太郎, 1938.5, 「ソロキンの社会文化的過程形式論の評価—社会文化的變動の形式(4)—」(京都大学『経済論叢』第46巻, 第5号, 680頁-694頁).

1940年代

- 鈴木栄太郎, 1940.12, 『日本農村社会学原理』(時潮社, のち1968年『鈴木栄太郎著作集 日本農村社会学原理』第1巻, 第2巻, 未来社, また1990年, 湯沢雍彦監修『「家族・婚姻」研究文献選集』第10巻, クレス出版として再版).
- 布川孫市, 1941.3, 「人口的要素と社会現象との相互関係」(『人口問題』第3巻, 第4号, 197頁-240頁). * Sorokin, 1929 ch.viiの抄訳. 署名は静淵.
- 野尻重雄, 1942『農民離村の実証研究』(岩波書店, のち1978年, 近藤康男編, 『昭和前期農政経済名著集』第10巻, 農山漁村文化協会として再版).
- 大道安次郎, 1948.8, 「ソロキン『現代の危機』について」(『ブック・レビュー』東洋経済新報社, 第9巻, 45頁-81頁).
- 尾高邦雄, 1949.4, 「新しい総合の立場」(『社会学の本質と課題』第3章第2節, 有斐閣, 242頁-276頁).
- 佐藤光子, 1949.12, 「感覚文化を超ゆるもの—ソロキンについて—」(『開拓者』第480号

12月, 6頁-11頁).

1950年代

山本登, 1950, 「社会移動の概念—ソローキン説の批判を中心として」(和歌山大学『学芸研究』1号, 265頁-290頁, のち1984年, 山本登著作集第1巻『社会階級と社会成層』第4章, 明石書店, 67頁-95頁に所収).

小野哲, 1951.1, 「P.A. Sorokinの平和計画について」(『同志社法学』第7号, 99頁-110頁).
北野熊喜男, 1952.6, 「ソロキンの唯物論批判について」(『国民経済雑誌』第85巻, 第6号, 1頁-21頁).

山本新, 1954.6, 「ソローキン」(『理想』第253号, 48頁-50頁).

山本新, 1954.6, 「ソローキン—その思想と著書」(『出版ニュース』第273号, 7頁).

大道安次郎, 1954.5, 「ソローキン」(早瀬利雄, 馬場明男編著『現代アメリカ社会学』培風館, 293頁-298頁).

家坂和之, 1955, 「トインビーの社会理論の構造」(『東北大学文学部年報』第6号, 142頁-185頁).

大道安次郎1957.1, 「書評II, Sorokin, Fads and Foibles in Modern Sociology and Related Sciences, 1956」(『社会学の窓』第1号, 11頁-12頁).

井上勇, 1957.2, 「アメリカの性の革命」(『世界週報』, 第38巻, 第6号, 48頁-57頁).

宮崎信彦, 1957.12, 「近世史の終末論—ベルジャエフとソローキン—」(『共立女子大学短期大学部紀要』第1号, 1頁-31頁).

清水盛光, 1959.3, 「集団の本質と其の属性—社会集団に関する私論(二)—」(京都大学『人文学報』第10号月, 1頁-52頁).

1960年代

山本新, 1961.12, 「トインビー批判の検討」(『文明の構造と変動』創文社, 442頁-494頁).

宗像巖, 1964.6, 「P.A.ソローキンの社会変動論—戦争理論を中心として—」(『上智経済論集』第11巻, 第1号月, 9頁-26頁).

馬場明男, 1964.7, 「ソロキン教授と二つの記念論文集」(日本大学『社会学論叢』第29号, 45頁-50頁).

馬場明男, 1964.11, 「ソロキン教授アメリカ社会学会長に就任」(日本大学『社会学論叢』第30号, 55頁).

- 家坂和之, 1965.10, 「ソローキンにおける人間の研究-1. P.A. Sorokin, A Long Journey, 2. Allen, ed., Pitirim A. Sorokin in Review.」(東北大学『文化』第29巻3号, 128頁-137頁).
- 大坪重明, 1967.10, 「所謂「文化二分論」(dichotomic theories) に対するソーロキン批判について」日本大学『経済集志』第37巻4号, 274頁-291頁).
- 白田貴郎, 1967, 「ソローキンにおける現代の危機の分析と人格構造論」(千葉大学『文化科学紀要』第9輯, 1頁-33頁).
- 馬場明男, 1967.6, 「ソヴェト社会学-歴史的展望と現代的状況-」(日本大学『社会学論叢』第38号, 16頁-51頁).
- 長尾周也, 1967.12, 「社会的可動性の増大」(『現代の階級理論』第2章第4節, ミネルヴァ書房, 269頁-304頁).
- 鈴木広, 1968.2, 「社会的移動論序説」(東北大学『社会学研究』第29号, 未見) *のち注を整備して(鈴木広, 1969)に再掲載.
- 今崎秀一, 1969.7, 「ソローキンにおける愛の研究」(『桃山学院大学社会学論集』第2巻, 第1号, 16頁-37頁).
- 倉橋重史, 1969.7, 「社会的時間に関する諸問題-P. A. ソローキンの概念をめぐる-」(『桃山学院大学社会学論集』第2巻, 第1号, 38頁-49頁).
- 山本新, 1969.1, 「世俗化の比較研究」(『トインビーと文明論の争点』第6章, 勁草書房).
- 鈴木広, 1969.8, 「社会的移動論序説」(九州大学『哲学年報』第28輯, 217頁-259頁, のち1970年, 『都市的世界』第2章「社会的移動論の諸問題」33頁-75頁, 誠心書房に所収).

1970年代

- 清水盛光, 1971.6, 「成立事情を基準とする集団分類の意義」(『集団の一般理論』第2篇, 第1章, 第1節, 岩波書店, 163頁-172頁).
- 横山寧夫, 1971.9, 「ピトリム・ソローキン」(『社会学史概説』第5章第4節(3), 慶應通信, 239頁-243頁).
- 安田三郎, 1971.11, 『社会移動の研究』(東京大学出版会).
- 三浦典子, 1972.3, 「社会移動とアノミー」(『哲学年報』第31輯, 149頁-170頁).
- 船津衛, 1972.4, 「ソローキンの理論」(新明正道監修『現代社会学のエッセンス-社会学理論の歴史と展開』, ベリかん社, 235頁-250頁).
- 早瀬利雄, 1972.5, 「近代社会学とマルクス主義社会学-社会体制の科学としての社会学

序説」(『現代社会学批判』付論II, 新評論, 316頁-332頁).

鷹田和喜三, 1972.7, 「アメリカにおける農村社会学の起源と発達—ネルソン教授の所論の紹介—」(『拓殖大学論集』第84号, 241頁-265頁).

松本和良, 1973.10, 「社会科学の独自性」(『組織構造の理論』学文社, 3頁-17頁).

倉橋重史, 1974.11, 「社会的空間の諸問題」(『桃山学院大学社会学論集』第8巻, 第1号, 1頁-33頁).

鷹田和喜三, 1975.8, 「アメリカ農村社会学における最近の『社会変動論』の動向(その1)」(『拓殖大学論集』第101号, 179頁-215頁).

細川幹夫, 1977.10, 「『ソローキンの精神史』の社会学」(『利他愛—良き隣人と聖者の研究—』解説I, 広池学園出版部, 277頁-284頁).

細川幹夫, 1977a.10, 「『創造的利他主義』研究の意義」(『利他愛—良き隣人と聖者の研究—』解説III, 広池学園出版部, 293頁-311頁).

下程勇吉, 1977.10, 「三つの『文化の型』」(『利他愛—良き隣人と聖者の研究—』解説II, 広池学園出版部, 285頁-293頁).

佐々木交賢, 1978.9, 「社会学的総合認識」(『デュルケム社会学研究』第5章, 恒星社厚生閣, 108頁-127頁).

1980年代

川合隆男, 鹿野又伸夫, 熊田俊郎, 阿久津昌三, 片山龍太郎, 1982.6, 「P.A. Sorokinの社会移動論とその再検討」(慶應大学院『社会学研究科紀要』第22号, 87頁-95頁).

鷹田和喜三, 1984.1, 「自然村・開拓村・ラーバンコミュニティ—北海道農村の社会的性格に関する研究ノート—」(『拓殖大学論集』第146号, 181頁-209頁).

細川幹夫, 1985.12, 「解説」(『若い愛 成熟した愛』解説, 広池学園出版部, 469頁-477頁).

鷹田和喜三, 1986.1, 「集村・散村・ネーバーフッド—北海道農村の社会的性格に関する研究ノート(2)—」(『拓殖大学論集』第163号, 169頁-205頁).

高城和義, 1986.6, 「宗教の世俗化とエキュメニズム」(『パーソナルの理論体系』展望第3節, 日本評論社, 299頁-308頁).

有本章, 1987.2, 「ソローキンの科学社会学における公式化」(『マートン科学社会学の研究』第6章第1節, 福村出版株式会社, 233頁-239頁).

1990年代

- 倉橋重史, 1991.11, 「絵画社会学の方法」(『絵画社会学素描』第4章2, 晃洋書房, 36頁-46頁).
- 馬場明男, 1992.3, 「英米社会学会における記念論文集-1950年代より現代までの展開(その1)-」(日本大学『社会学論叢』第113号, 35頁-50頁).
- 高城和義, 1992.9, 「『社会的行為の構造』をめぐる論争」(『パーソンズとアメリカ知識社会』第4章第2節, 岩波書店, 100頁-120頁).
- 倉橋重史, 1993.3, 『ひと,とき,ところ-社会学私考-』(晃洋書房)* (倉橋, 1969, 1974) を抄録.
- 倉橋重史, 1994.4, 「P・A・ソローキン(1889-1968)」(『社会学史点描』第12章2, 晃洋書房, 291頁-300頁).

2. 参考文献

- Allen, Philip J., ed., 1963, Pitirim A. Sorokin in review, Durham, N.C., Duke University Press.
- 銅直勇, 1964, 「米田庄太郎博士の<純正社会学>」(『社会学評論』第55号, 49頁-61頁).
- Ford, Joseph B., Michel P. Richard, and Palmer C. Talbutt, 1995, *Sorokin and civilization: a centennial assessment*, Transaction Publishers.
- Ford, Joseph B., Sorokin as Philosopher, in (Allen ed. 1963).
- , Sorokin's Methodology: Integralism as the Key. in (Ford, eds., 1996).
- Hanson, 1995, Sorokin as Dialectician, in (Ford eds., 1995).
- 川合隆男, 武村英樹, 1998, 『近代日本社会学者小伝-書誌的考察-』(勁草書房).
- Merton R. K. and B. Barber, 1963, Sorokin's Formulations in the Sociology of Science, in (Allen ed., 1963), (Merton, 1965).
- , 1965, *On the shoulders of giants: a Shandean postscript*, with a foreword by Catherine Drinker Bowen, Free Press.
- Park, Robert E. and Ernest W. Burgess, 1921, *Introduction to the science of sociology*, University of Chicago Press.
- Parsons, T., 1963, Christianity and Modern Industrial Society, in (Tiryakian ed. 1963).
- Sorokin, P. A., 1925, *The sociology of revolution*, J.B. Lippincott.
- , 1927, *Social mobility*, Harper & Row.
- , 1928, *Contemporary sociological theories*, Harper & Brothers.

- , 1929, with Carle C. Zimmerman, *Principles of rural-urban sociology*, Henry Holt.京野正樹, 1940[1977, 巖南堂書店], 『都市と農村—その人口交流』刀江書院, [Part 1, 5の部分訳], 館稔訳, 1943, 『都鄙人口の體力と増殖力』汎洋社, [Part 2の部分訳].
- , 1937-1941, *Social and cultural dynamics*, American Book Co..
- , 1941, *The crisis of our age: the social and cultural outlook*, Dutton, 北哈吉, 渡辺勇助共訳, 1955, 『現代の危機』, 日本経済道德協会.
- , 1942, *Man and society in calamity: the effects of war, revolution, famine, pestilence upon human mind, behavior, social organization and cultural life*, New York: , Dutton, 大矢根淳訳, 1998, 『災害における人と社会』, 文化書房博文社.
- , 1943, *Sociocultural causality, space, time: a study of referential principles of sociology and social science*, Durham, N.C., Duke university press.
- , 1947, *Society, culture, and personality: their structure and dynamics*, Harper, 鷺山丈二訳, 1961-1962, 『社会学の基礎理論—社会・文化・パーソナリティー』, 内田老鶴圃, [上 chap. 1-4の訳, 下 chap. 5-9の訳].
- , 1948, *The reconstruction of humanity*, Beacon Press, 北哈吉訳, 1951, 『ヒューマニティの再建』, 文芸春秋社.
- , 1950, *Altruistic love: a study of American "good neighbors" and Christian saints*, Beacon Press, 下程勇吉監訳, 1977, 『利他愛—善き隣人と聖者の研究』, 広池学園出版部.
- , 1954, *The ways and power of love: types, factors, and techniques of moral transformation*, Boston, Beacon Press, 細川幹夫ほか訳, 1985, 『若い愛成熟した愛—比較文化的的研究』, 広池学園出版部.
- , 1963, *A long journey*, New Haven, Conn., College and University Press.
- , 1966, *Sociological theories of today*, Harper & Row.
- 杉野忠夫, 1967, 「小農研究に関するソローキン及びジンマーマンの寄与について」(杉野忠夫遺稿刊行会編『杉野忠夫遺稿集』未見).
- Tiryakian, Edward A. ed., 1963, *Sociological theory, values, and sociocultural change: essays in honor of Pitirim A. Sorokin*, Free Press of Glencoe.
- Toynbee, 1963, Sorokin's Philosophy of History, in (Allen ed., 1963).
- 山岡栄市, 1983, 『人脈社会学—戦後日本社会学史—』お茶の水書房.
- Zimmerman, Carle Clark, 1929, *The Trend of Rural Sociology*, Lundberg, George A., Read Bain, Nels Anderson eds., *Trends in American sociology*, Harper.